月刊 指導計画 6月号（チャイルド本社）1997

何げない気づかい

広島文教女子大学教授
広島文教女子大学付属幼稚園園長補佐
神原雅之

イラスト／三浦雅子

子どもたちは砂あそびが大好きです。先日、その砂場でとてもうれしいできごとに出会いました。

Aちゃんは友達といっしょに遊べず、ひとりポツンとしていることが多い子です。そのようすが気がかりだったG先生は、Aちゃんを誘って砂場に行ってみました。しかし、たまたま砂場の砂がとても硬かったので、G先生はくわを取り出し、砂を掘り返し始めたのです。初めはくわも歯が立たないほどでしたが、それでも徐々に砂は軟らかくなっていきました。

そうしていると、子どもたちが、「何してるの？」などと言いながら集まり、小さな群れができました。もう、その後は想像のとおり。子どもたちが「ぼく、手伝うよ」「私もー」というわけで、小さな手で砂を掘り返し始めました。やがて、「山を作ろう」ということになり、このときは、これまでに見たこともないような大きな山ができました。もちろん、その輪の中では、Aちゃんも大活躍していました。

しばらく遊んだところで片づけの時間になり、その大きな山をどうするか（つぶすか、そのままにしておくか）、子どもたちのあいだで議論が始まりました。結局、子どもたちの手で元の状態に戻したのですが、このダイナミックな砂あそびの経験は、きっと子どもたちの心のなかに充実感や満足感となって残ったことでしょう。

このときのG先生の何げない行為が、とても重要なのだと思います。消極的なAちゃんはすっかり自分を取り戻して、あそびに夢中。このように、子どもはちょっとしたきっかけさえあれば、おとなの想像をはるかに超えるパワーで遊べるのです。

同じ日、園庭の隅のたいこ橋のところでは、子どもたちが何やら基地らしきものを作っていました。また、それにいすや机などを組み合わせ、別の意味あるものに変えて遊んでいました。ほかのクラスの先生が、いすや机を何げなく近くに置いてくださったのだと思います。このような何げない気づかいが、子どもたちに人やものとの新たなかかわりを促し、あそびをはぐくんだり、イメージを豊かにするきっかけとなっているのです。

今でも、この日のことを思いだすと、なんだかうれしくなってくるのです。